# 全電源喪失の記憶

証言　福島第1原発

5

## 「いる人間でやるべ」

■第4章「東電の敗北」

### 被ばく恐れず作業

3月14日昼すぎ、福島第1原発の3号機原子炉建屋西側の構内道路に、1台のショベルカーのエンジン音が響いていた。運転席には地元の協力企業栃本重機の専務栃本良重(51)が乗り、前方を歩く東京電力復旧班土木担当の国分千代美(51)が先導していた。

3号機の爆発で「逆洗弁ピット」から海水を吸い上げて原子炉に注水していた消防車やホースが破損した。一刻も早く注水を再開させるため、がれきを撤去して、代わりの消防車が通行できるようにしなければならなかった。

国分が指さしたがれきを栃本がどけていく。国分は持ち上げられそうな小さながれきを手でどけた。中には高線量のがれきもあったはずだが、国分はお構いなしだった。「知らないというのは恐ろしい。僕は事故直後の2、3日で100ミリ毎時弱の被ばくをしました」

2人とも警報付き線量計(APD)を持っていたが、作業中に警報が鳴ったかは記憶にない。「夢中だったんだろうな」と栃本は言う。

この時の栃本の作業については、所長の吉田昌郎(56)が後にこう語っている。「線量の高いがれきを、考えていたよりずっと短時間で片付けてくれた。重機の操作は発電所の社員もできなければならないな、とつくづく思いました」

栃本は11日の事故発生以降、崩れた構内道路の補修、津波や建屋爆発で散乱したがれきの撤去、バキュームカーを使った原子炉注水用の水の運搬と、縦横無尽に作業した。その姿を記憶する東電社員は口をそろえて「すごかった」と語る。

現場に出る時、栃本と国分はいつも一緒だった。4号機タービン建屋の大物搬入口で壊れたシャッターを撤去していた時には大きな余震に見舞われた。

津波を心配した国分が「逃げるよ！」と叫んだが、栃本は運転席を降りようとしない。最高でも時速7キロしか出せないショベルカーでのろのろと国分の後をついてくる。

「まだ買ったばかりでね、国分さんは『置いていけ』って言うけど、そんなわけにいかねぇよってね」と栃本は笑う。

どんな現場にも嫌な顔を見せずに出て行く栃本に、国分が尋ねた。「栃本さんは地元の人でしょ。文句の一つや二つ、言いたいんじゃないの」

栃本は笑って言い返した。「なっちゃったものはしょうがねえべ。いる人間でやるしかねえべ」

栃本は14日夜、国分にショベルカーの鍵を託して、他の協力企業とともに免震棟から退避した。「後はお願いします」

栃本はこの約2週間後、原子炉使用済み核燃料プールに注水するためコンクリート圧送機の遠隔操作方法を学び、第1原発に戻ってきた。（敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信　国分伸矢）

▲福島第1原発事故当時、栃本重機の栃本良重専務が使っていたショベルカー。今も構内で使われている＝6月